

幼児教育科への想い

井原忠郷

はじめに

私は今年度（平成21年）4月より本学に教師として就任しましたが、幼児教育に関わって約40年、幼稚園の世界一筋に生きて参りました。

私が幼児教育に関わった経緯や想いについてはまた別の機会に触れさせていただくことにして、今までは養成学校からの実習生を受け入れたり、学校を卒業して来た保育者を受け入れ、採用する立場でしたが、本学に就任することによって学生を育てる立場、送り出す立場になってみて、いろいろと考えること、思うことが出て参りました。

特に、私は男性保育者として32年間クラス担任として、直接子どもとの生活をしてきたという経験から、保育者養成側へのいろいろな思いや意見（時には養成学校サイドへの不満も）を持っていたわけです。しかし、実際に保育者養成の立場になってみますと、外側からでは分からない先生方のご尽力を直接見たり、感じたりすることによって、正直なところ「大変な場所へ来てしまった！」という感じを持っております。また同時に、予想していなかった学生たちの実態や状況を喜んでみたり、憤慨してみたりと戸惑いの多いことでもありました。

私は現在もお、小さな幼稚園の園長という立場も持っている関係で、幼児教育現場の園長や主任たちとの交流も多く、卒業していく学生たちを受け入れてもらう立場の厳しい意見もかなりストレートに入ってくるわけです。こうした両面の立場から、私なりに現在の本学の学生指導について、就任してまだほんのわずかな時間しか経過していないのではありますが、私の想いを提示させていただきたいと思います。

ただ、就任してまだ1年経過していない時期に、ある意味では時期尚早の感はありますが、十分理解できてないが故に思うこと、気づくこともあるのではないかと勝手に判断をしているところもあるとは思いますが、お赦しただきたいと思います。

目的意識の希薄さ

学生と対応して一番に感じたことは、保育者になることへの意識が希薄であると感じたことです。もちろん、現代っ子の学生ですから、ある意味では当然のことかも知れませんが、わずか2年間で、保育のプロを育てなければならぬのですから、教師陣がどんなに頑張っても有能な保育者の育ちは期待できないと思うのです。我々教師は、学生達の夢を叶えられるようにサポートするのが仕事であって、あくまでも夢をしっかり意識して、その目的へ向けての努力をしてもらわなければ「どうしようもない！」という現実があると思います。

言い換えるならば、本当に保育者になるつもりのない者は去ってほしい！ たった2年間でプロになるためには、教師陣も必死であることも必要なことではあるが、それ以上に当事者がどれくらい本気で目標達成を意識しているのか？ という基本的な考え方を、もう少し前面に出しても良いのではないかと思います。

各教科15コマ。最初は「15コマもあるのか？ もう少しすくなくはないのか？」と感ずることもあったのですが、実際講義を続け、指導をしていく内に、「もう5コマ、せめて20コマくらいあれば…！」と思うほど、指導時間の足りなさを感じるのは指導をしておられる、どの

先生方も感じておられると思うのです。

保育の重さを知らせる

本学の開講科目のシラバスを読んでみると実に豊富な内容と教師陣の熱心さを十分に感じることができ、園長の立場からはある種の感動を覚えたのですが、学ぶ側がその想いをどれくらい理解し、感じているのか？ という疑問を持つのです。このことは、幼児教育科だけの問題ではなく、子ども発達教育学科の学生にも感じられることで、この辺りの指導をしておく必要があるように思えるのです。

もちろん目的意識との関係も大きいと思うのですが、教育のプロになるためには、好きであっても、嫌いであっても真剣に取り組んでいくという姿勢の育ちが当然求められる訳です。

保育というものの捉え方が、まだまだ未熟であるがために、重さを感じることが出来ないということも考えられるのですが、わずか2年間という期間にプロフェッショナルに少しでも近づけるためには不可欠の課題ではないか？ と感じています。

指導講師によって態度が変わる学生については、少なくとも教職に就く資格はないと確信していますし、教師の卵としての最低限の姿勢をしっかりと指導する必要があると思います。

特に考えたい錬成

幼児教育科だけの課題ではありませんが、人の前に立つ職業（特に教職）を目指す者は、単に教職必須科目の履修をし、その単位を修得すれば良い！ というものではないと思います。

本学は特別な宗教教育はしませんが、歴代の教師陣は素晴らしい校風と教育の精神を我々に伝え、残して来られました。そのような保育（教育）に携わる者としての人間教育をもっと意識しなければならぬのではないのでしょうか？

人の心を育てることは決して容易なことではありません。しかし、教育はただ知識を次世代に伝えるだけのものではないはずです。

本当に本学が目指している「人間像(教師像)」はどんなものでしょうか？ そのことを具体的に示すだけのものが欲しいと思うのです。

ある教科で、あまりにも受講態度が悪いので本気で叱りましたところ、ふるえている学生がいました。私はそのことに驚いたのです。周りの人から大切に、大切に育てられたのでしょうか。厳しく叱られた経験がなかったのでしょうか。しかし、それだけではありませんでした。後でその学生に「叱り方が厳しすぎたかな？」と尋ねましたら、意外にも「先生がそこまで私たちのことを想っていて下さったとは知らなかったので、感激してふるえてしまいました。」と言われ、怖さではなく、想いが通じたふるえであったことを知って、私も感動をした訳です。

教育が全人的な育ちを考えるのであれば、彼等が保育（教育）の現場で子どもたちと向き合って生活をする時に、彼らそのものがそのまま「教育」になることを、もっと教育していく必要があると感じたわけです。

その意味からも、何らかの形で学生自身の『錬成』について考えてみる必要があると思うのです。特に教職に就くことを望んでいる学生達は「選択科目」ではなく「必須科目」としての位置づけを持たせるくらいの重要性を感じるのです。

比治山ブランドのプライドを

保育者養成学校は数多くありますが、「比治山でなければダメ！」と言われるほどの保育界のブランドでありたいと思っています。そのためには、保育者としての学力、技術力、精神力はもちろんのこと、人間性の豊かな心優しい愛の実践者であることが求められると思います。そのような保育者に育って欲しい、育てたいと願っているのです。本学ならば、比治山大学短期大学部幼児教育科であれば十分可能だと確信しています。その想いをもっと大きく膨らませていくことを幼児教育科全体の想いと夢にしたいと思うのですが！